2025年3月 文京区立森鷗外記念館編集・発行（年4回発行）

文京区立 森鷗外記念館NEWS No.50

目次

巻頭コラム「充実した文学発信の基地として―50号を迎える「文京区立森鷗外記念館NEWS」―」中島国彦（日本近代文学館理事長・全国文学館協議会会長）／展示報告／カフェ便り／ショップ便り／展示のお知らせ 特別展「本を捧ぐ――鷗外と献呈本」／特集「文京区立森鷗外記念館NEWS」アーカイブス／主な寄贈図書一覧／これからの催しもの／2025年度前期開館カレンダー／編集後記

巻頭コラム

充実した文学発信の基地として
―50号を迎える「文京区立森鷗外記念館NEWS」―

中島国彦（日本近代文学館理事長・全国文学館協議会会長）

季節の変わり目ごとに、薄いブルーの色の封筒で文京区立森鷗外記念館の「NEWS」が送られて来る。また、特別展、コレクション展が始まるのだな、と思う。A4判、表紙全面の資料カラー図像が鮮やかだ。大きな封筒で二つ折りでなく送られてくるので、封を開けた時のときめきは格別である。年四回刊のクオータリーだが、もう新しい号が届いたと発行の間隔が短く感じられるのも、記念館の行事の密度が濃いためであろうか。

記念館の開館は二〇一二年十一月、翌二〇一三年一月に「森鷗外記念館NEWS」1号が創刊され、これまでコンスタトに年四回刊行されてきた。実は、開館前に0号（開館準備号）が二〇一二年九月に出ており、二〇二二年のコロナ下の31・32号が合併号なので、今回の50号がちょうど五十冊目ということになる。バックナンバーを繰って、この十年間の文学館というものの意味、刊行物の働きを改めて考えることができた。

この時期は、各地に文学館、記念館、特に一人の文学者を顕彰する施設が誕生し、おのずからどういう特色のある活動をしたらよいかが問われる時期であった。そうした中で、定期的に発行する館報、ニューズレターの役割も大きく、それぞれのさまざまな工夫がなされたように思う。回数も、年一、二回から、以前から出ていた日本近代文学館の館報のように隔月刊行までさまざまで、館の性格、職員数、運営母体によって、いろいろである。その中で、カラー四ページ、モノクロ四ページ、全体が八ページ建ての「森鷗外記念館NEWS」は、個人記念館の刊行物として、新しい試みをしつつ順調に成長したと思う。

文学館には資料収集、保存、公開の三つの柱があるが、文京区が森家から寄贈を受けていた資料をそのまま引き継ぎ、しっかりした収蔵庫を完備した施設も建設され、恵まれた条件を持っていた。あとは公開の工夫である。せっかくの鷗外資料を多くの人に知ってもらいたい、鷗外をもっと読んでもらいたい、そうした一念で、訪れる人を増やす広報の手立てとして、この「NEWS」が編集されていたように思う。日常の活動報告はもとより、新しい展覧会の案内としての魅力的な資料紹介、さらには次回展覧会の予告まで、内容は盛りだくさんだ。情報量は、他の文学館のそれに比べはるかに多く、資料や人物写真を積極的に使用した誌面作りにも、力が入っている。

記念館の強みとして、館の若い学芸スタッフの日常の仕事を背後から支える、山崎一穎さんを中心にした研究者たちの存在は大きい。それらの人々が結集している「森鷗外記念会」の存在は、他の文学館にない強みだと思う。それがなければ、春秋の年二回の特別展の図録も、高い達成にはならなかっただろう。鷗外研究者が絶えず舵を取り、進んでいく中で、学芸スタッフの調査による新発見の事実が、研究者側を驚かせたこともある。

短時間で仕上げなければならない図録作りの作業が軌道に乗ってからは、「NEWS」編集にも余裕ができたからか、加賀乙彦名誉館長の談話、さまざまな分野の研究者の寄稿、記念対談、楽しいコラムなど、新しい企画が誌面を賑わせて来る。「森鷗外記念会通信」や記念会の機関誌「鷗外」に載った文章とも違った面白さだ。他の文学館との連携を示す記事が見えるのも、絶えず前向きに誌面構成をしようとする意欲の表れであろう。それにしても、記念館の春秋の展覧会図録は、高水準で、資料として貴重であり、机辺から離せない。毎回、新しい工夫があり、手に取るのが待ち遠しい。特別展の間をつなぐ、コレクション展の時は図録を作らないが、出品目録や解説を組み入れた、コンパクトな「ミニ展示ガイド」が作られ、入手できる。

記念館には、毎年「年報」という名前の年間報告集の冊子がある。一般には配布されないが、館の図書室などで見ることができる。年間の行事の詳細な記録的データを集めただけでなく、年間の収蔵資料のリストもある。こうした年報は他の公立の多くの文学館や記念館でも発行しているところもあるが、森鷗外記念館のていねいな記録作りの姿勢には及ばない。

ここで思い出すのは、津和野町立の森鷗外記念館の「館報」である。名前が「ミュージアムデータ」と題されていることからもわかるように、館蔵資料、新収資料、鷗外の著作の書誌など、鷗外資料の丹念な紹介を目指しており、文京区の記念館との住み分けが見られるように思う。

全国一〇〇館もの文学館の連絡組織のまとめ役をしていると、それぞれの文学館の個性が理解できる。文京区の森鷗外記念館のバックヤードは活気に満ちており、いつも動いている。文学館の生命は「もの」（資料）だけではなく「人」の働きにもある、というのがわたくしの考えだが、いつでも文学の「感興」を伝えたいという積極性が感じられるのはうれしい。充実した展覧会をすれば新たな寄贈が生まれる、とわたくしは信じているが、記念館には毎年記憶に新しいユニークな寄贈が実現し、一層の発展が見られていることをよろこびたい。

中島国彦
なかじま・くにひこ

早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了、博士（文学）。早稲田大学名誉教授、日本近代文学館理事長、全国文学館協議会会長。『白秋全集』『荷風全集』『定本 漱石全集』（いずれも岩波書店）などの編纂に携わる。著書に『近代文学にみる感受性』（筑摩書房、平成6年、やまなし文学賞）、『漱石の地図帳 歩く・見る・読む』（大修館書店、平成30年）、『森鷗外 学芸の散歩者』（岩波書店、令和4年）など。

左：短歌や随筆を掲載した喜美子の著書、喜美子と鷗外の作品が収録された『かげ草』を展示（中央・パネル右下のケース）

右：喜美子の自筆原稿、日本語翻訳作品が掲載された雑誌などを展示。

展示報告

コレクション展
「鷗外の妹・喜美子の家族 ―森家と小金井家―」
2025年1月18日（土）～4月6日（日）

本展では、森鷗外の妹で、明治の女性文学者として知られる小金井喜美子（明治3―昭和31）に焦点をあて、その人物像と、彼女を中心とした実家・森家と、結婚後の家族・小金井家の交流を紹介しました。

喜美子は、現・島根県津和野町に森家の第三子として生まれ、幼少時に上京。東京師範学校附属高等女学校卒業を前に、解剖学者で人類学者の小金井良精（安政5―昭和19）と結婚し、4人の子どもを出産します。義理の親、子や孫ら大勢の家族や家のことに目配りをしながらも、執筆活動を続け、明治大正昭和を生き抜きました。

本展は3章からなり、「Ⅰ鷗外の妹・喜美子」では喜美子の幼少期から女学校入学まで、「Ⅱ小金井喜美子の誕生」では、小金井良精との結婚、女学校の卒業、それに続く文学活動、「Ⅲ喜美子の二つの家族」では、小金井家と森家の交流を中心に紹介しました。

10歳に満たない喜美子が清書した父の著書序文、ドイツ留学中の兄・鷗外に宛て自分の勉強や女学校受験の報告や短歌を綴った書簡（10代）、シュービンの小説の日本語訳原稿（20代）、与謝野晶子・寛の添削を得た短歌草稿（60代）、兄・鷗外の手紙を回想する随筆原稿（70代）、など喜美子の文筆活動を、自筆資料を通じてご覧いただきました。

今回展示の喜美子宛の手紙で、鷗外は、最近の文学の動向への関心と批判（明治38年7月28日）や、子育てなど家庭での生活と文学活動の両立に悩む喜美子へ、焦らずにできることをやっていくことの意義（明治38年推定12月29日）を記しています。喜美子に、文学の世界における同士や後輩のようにも接していた様子とあわせ、鷗外の素顔が見えてきました。

森家と小金井家については、様々なエピソードを記した随筆が収録された著書『森鷗外の系族』『鷗外の思い出』に加え、良精が旅先から鷗外の長男・於菟に送った葉書、鷗外の死に際して喜美子・良精の長男・良一が留学中の於菟に送った電報などを展示しました。また、喜美子の孫でSF作家・星新一旧蔵の鷗外筆喜美子宛書簡（「星ライブラリ」蔵）の展示が叶い、喜美子が結んだ森家・小金井家の交流が、代から代へとつながる様子もご覧いただきました。

本展が、鷗外の妹・喜美子の存在を改めて多くの方に知っていただき、同時に鷗外への理解を深める一つの機会になることができたとしたら幸いです。

最後になりましたが、本展を開催するにあたりご協力を賜りました関係者の皆さまに厚く御礼申しあげます。

―――

○「ミニ展示ガイド」を発行しました。
展示キャプションや関連年譜を収録。
（B5判、12頁、税込300円）

○展示関連講演会を実施しました。
「小金井喜美子の歌世界」
講師：今野寿美氏（歌人・宮中歌会始選者）
日時：3月8日（土）14時～15時30分

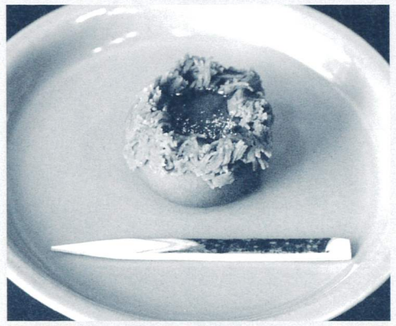
カフェ便り

モリキネカフェ mirikine cafe

モリキネカフェではコレクション展「鷗外の妹・喜美子の家族―森家と小金井家―開催にあわせ、展覧会にちなんだ限定デザート「きみこセット」を4月6日まで販売しています。

喜美子は翻訳、随筆、小説のほかに、短歌も多く創作しました。70歳の時には歌文集『泡沫千首』を刊行します。日々の出来事を詠んだ歌の中には、「苔」を詠んだ歌がいくつかあります。その中の一首「苔、苔、苔、苔ばかりなりこの外は上の青空、空映る池」をモチーフとし、喜美子も住んだことのある足立区千住の和菓子店「喜田家」に依頼して、「苔」を意匠としたオリジナルの練り切りを作っていただきました。

苔玉の様なコロンとした可愛らしい和菓子は、よくみると苔が茂ったなかに池を思わせる透き通った部分があり、そこには銀粉が散らばっています。その様子は水面にきらめく泡沫を彷彿とさせてくれます。喜美子の短歌を想いながら、和菓子とともにゆっくりした時間をお過ごしください。



ドリンク付き 税込1,000円～

ショップ便り

オリジナル新商品のご案内です。ご来館アンケートなどでもご要望が多かった、鷗外アクリルスタンドを2月半ばより販売しています。鷗外の写真は明治45年1月、50歳の時期に撮影されたもので、立幅110ミリで飾るにも持ち運ぶにも便利なサイズです。台紙には観潮楼の敷石、門柱跡が残る薮下通り側の写真を使用しており、ポストカードとしてもご利用いただけるサイズになっています。お土産やプレゼントにいかがでしょうか。

税込950円

4月6日まで「お友達と一緒に鷗外パスに入ろう！」キャンペーンを実施中です。期間中、お友達と一緒に（二名以上で）購入いただいた方には、モリキネカフェで使える「アイスクリーム無料券」を各1枚プレゼントしています。また、既に鷗外パスをお持ちの方は、一緒に来館したお友達が購入すると、それぞれにプレゼントいたします。鷗外パスは購入日から1年間、何度でも展覧会を観覧いただけて様々な特典も付いたお得な定期観覧券です。この機会に是非ご購入ください。

鷗外パス
税込1,200円

展示のお知らせ

特別展「本を捧ぐ——鷗外と献呈本」

鷗外の居宅・観潮楼（現・当館）は、妻・志げが「宅では本が箪笥を追い出します」とこぼすほど本が溢れていました（後藤末雄『鷗外先生を顧る』）。内容は文学、医学、哲学、歴史、自然科学、美術など多岐に渡り、鷗外が持つ豊かな知識はこの読書量に支えられていました。

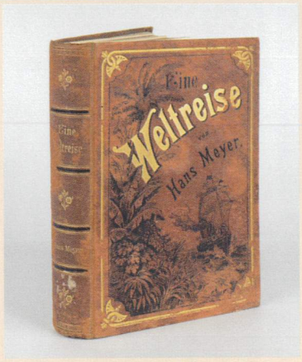
蔵書には自ら買い求めた本以外に、鷗外に贈られた本——いわゆる献呈本も含まれています。北原白秋、木下杢太郎、石川啄木など若い文学者はそれぞれの著書に鷗外への敬慕をうかがわせる献辞を記し、評論家・内田魯庵や美術史家・大村西崖は鷗外が関心のある分野の本を贈りました。そうした現存する本には、鷗外が読み大切に保管した痕跡が認められます。一方鷗外も、夏目漱石や与謝野寛・晶子など信頼のおける文学者に自著を贈り、家族にも本をプレゼントしました。本の贈答は鷗外の若い頃から見られますが、活躍の場と人脈が広がると共に、その数も増えていったようです。

本展では、東京大学総合図書館の鷗外旧蔵書コレクション「鷗外文庫」を中心に鷗外に贈られた本を、そして鷗外日記や書簡をたよりに鷗外が贈った本を展覧します。蔵書を「最も大切にした」（森於菟『砂に書かれた記録』）という鷗外の、〈本〉をとおしてうかがえる幅広い人物交流の様をご覧ください。

監修：須田喜代次氏（大妻女子大学名誉教授、森鷗外記念会会長）
協力：東京大学総合図書館、川島幸希氏、公益財団法人日本近代文学館、県立神奈川近代文学館

会期●2025年4月12日（土）——6月29日（日）
［会期中の休館日］4月22日（火）、5月26日（月）・27日（火）、6月23日（月）・24日（火）
会場●文京区立森鷗外記念館 展示室1、2
開館時間●10時～18時（最終入館は17時30分）
観覧料●一般600円（20名以上の団体：480円）
※中学生以下無料、障害者手帳ご提示の方と介護者1名まで無料
※文京ふるさと歴史館入館券、パンフレット（押印入）、友の会会員証ご提示で2割引き
※その他各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。

鷗外に贈られた本
鷗外旧蔵書。文学のみならず、医学書、外国語の辞典など様々な本が鷗外に贈られた。

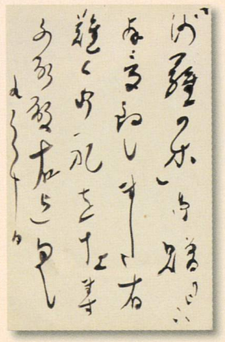


ハンス・マイヤー『世界旅行記』1885年
鷗外がドイツ留学時代の友人ヴィルケより贈られた。見返しに「Mori Rintaro kunni teiju」とローマ字で記されている。

石川啄木『一握の砂』東雲堂書店 明治43年
東京大学総合図書館蔵
啄木による鷗外への献呈本。「森先生に捧ぐ著者」と記されている。

鷗外の書斎　大正11年撮影

北原白秋訳『まざあ・ぐうす』アルス 大正10年
鷗外の次女・杏奴旧蔵。白秋による鷗外への献呈本に、鷗外が「アンヌに 森林太郎」と書き添えている。



夏目漱石筆 鷗外宛葉書
大正4年9月10日
鷗外が漱石に贈った詩歌集『沙羅の木』に対する礼状。

関連事業のお知らせ

展覧会期間中に関連講演会を予定しております。会場はいずれも当館2階講座室（定員50名）です。申込方法は7頁をご覧ください。

講演会1
「献呈署名本の世界」
講　師　川島幸希氏（秀明大学名誉学長、近代文学署名本コレクター）
日　時　5月17日（土）14時～15時30分
定　員　50名（事前申込制）
料　金　無料（参加票と本展観覧券（半券可）が必要）
申込締切　5月7日（水）必着

講演会2
「鷗外献呈本に見る大逆事件」
講　師　坂井修一氏（東京大学副学長・附属図書館館長、歌人）
日　時　5月31日（土）14時～15時30分
定　員　50名（事前申込制）
料　金　無料（参加票と本展観覧券（半券可）が必要）
申込締切　5月19日（月）必着

ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。申込不要、当日の展示観覧券が必要です。
日時　4月23日、5月21日、6月18日いずれも水曜日 14時～（約30分）

特集

文京区立森鷗外記念館NEWS アーカイブス

本誌「文京区立森鷗外記念館NEWS」は平成25年1月の創刊以降、毎年度6・9・12・3月の計4回、A4判・8頁の判型で刊行しています。毎号、研究者や作家、文学館関係者の方などにコラムや論考をご執筆いただきました。50号発行の節目に、これまでのタイトルと執筆者を振り返ります。

※肩書は掲載時のもの

No.1　平成25年1月発行
○「文京区立森鷗外記念館 開館によせて」
森憲二氏（森鷗外記念会常任理事）

No.2　平成25年3月発行
○「文京区立森鷗外記念館・明治大学共催学術シンポジウム光源としての〈森鷗外〉——いま、〈近代〉を問い返す」
倉本幸弘氏（森鷗外記念会常任理事）

No.3　平成25年6月発行
○「沙羅の木の花」
倉本幸弘氏（森鷗外記念会常任理事・日本工業大学共通教育系非常勤講師）
○「明治時代の榛原」
藤本敦美氏（榛原聚玉文庫）

No.4　平成25年9月発行
○「名誉館長談 鷗外とルードヴィヒ二世」
加賀乙彦氏（当館名誉館長）

No.5　平成25年12月発行
○「名誉館長談 森鷗外を読み始めた頃」
加賀乙彦氏（当館名誉館長）

No.6　平成26年3月発行
○「鷗外の列車の旅 ノイディーテンドルフ駅」
ベアーテ・ヴォンデ氏（ベルリン森鷗外記念館副館長）

No.7　平成26年6月発行
○「名誉館長談『即興詩人』」
加賀乙彦氏（当館名誉館長）
○「鷗外と遺言状」
小泉浩一郎氏（当館運営協議会会長、東海大学名誉教授）

No.8　平成26年9月発行
○「三陸海岸の記憶」東直子氏（歌人）

No.9　平成26年12月発行
○「鷗外、流行へのまなざし」
宗像和重氏（早稲田大学教授）

No.10　平成27年3月発行
○「観潮楼周辺の映画史跡」
上田学氏（日本学術振興会特別研究員）
○「三越・ブランヴィン・鷗外」
田良島哲氏（東京国立博物館）

No.11　平成27年6月発行
○「名前と人の世——『小倉日記』について」
前田恭二氏（読売新聞文化部次長）
○「森於菟作『一夜』のもたらすもの」
田中実氏（都留文科大学名誉教授）

No.12　平成27年9月発行
○「鷗外を撮った写真師、江崎禮二」
日比谷安希子氏（横浜市民ギャラリーあざみ野学芸員）

No.13　平成27年12月発行
○「鷗外と裸体画」
増野恵子氏（早稲田大学・跡見学園女子大学非常勤講師）
○「記念対談 加賀乙彦（当館名誉館長）×山崎一穎（森鷗外記念館〈津和野〉館長）」
※本誌のために特別対談を行った

No.14　平成28年3月発行
○「明治の向島——鷗外と歩く——」
岡戸敏幸氏（早稲田大学非常勤講師）
○「大正四、五年の森鷗外——転生への渇望——」
小泉浩一郎氏（東海大学名誉教授、森鷗外記念会会長）

No.15　平成28年6月発行
○「千住 森家と町の暮らし——」
多田文夫氏（足立区郷土博物館学芸員）
○「論考『森鷗外自筆／舞姫草稿』の意義」
山崎一穎氏（跡見学園理事長、森鷗外記念会顧問）

No.16　平成28年9月発行
○「鷗外とアンデックス修道院——ある青春の一日——」
美留町義雄氏（大東文化大学教授）
○「異文化との出会いから——北海道・有島記念館」
伊藤大介氏（有島記念館主任学芸員）

No.17　平成28年12月発行
○「鷗外と小倉の歴史」
今川英子氏（北九州市立文学館館長）
○「論考『文づかひ』森鷗外自筆原稿——推敲の跡をたどって——」
檀原みすず氏（大阪樟蔭女子大学准教授）

No.18　平成29年3月発行
○「千駄木 薮下通から——」
倉本幸弘氏（森鷗外記念会常任理事）

No.19　平成29年6月発行
○「啄木と鷗外——石川啄木記念館の試み」
森義真氏（石川啄木記念館館長）

No.20　平成29年9月発行
○「森於菟と台湾」
呉佩珍氏（国立政治大学台湾文学研究所）

No.21　平成29年12月発行
○「文京区立森鷗外記念館、開館5周年に寄せて」
森まゆみ氏（作家、編集者）

No.22　平成30年3月発行
○「西周と鷗外の懐をえぐって」
樺山紘一氏（印刷博物館館長）
○「文学は誰のものか？——文化資源の活用と地域連携」
石田仁志氏（東洋大学教授）

No.23　平成30年6月発行
○「藤田嗣章其子嗣治を伴ひ来て面会せしむ」
須田喜代次氏（大妻女子大学教授）
○「日本近代文学館 これまでとこれから～五〇年を歩んで～」
信國奈津子氏（公益財団法人日本近代文学館事務局職員）

No.24　平成30年9月発行
○「二冊揃った『日本からの手紙』——四十年近い歳月をかけた快挙」
中島国彦氏（早稲田大学名誉教授）
○「森鷗外と斎藤茂吉」
後藤明日香氏（斎藤茂吉記念館学芸員）

No.25　平成30年12月発行
○「宮沢賢治と森鷗外～宮沢賢治記念館の現在～」
宮澤明裕氏（宮沢賢治記念館学芸員）
○「論考 石田少佐の微笑み——『鶏』を読む人のために——」
田中実氏（都留文科大学名誉教授）

No.26　平成31年3月発行
○「論考『礼儀小言』—論号、元号、即位式—」
山崎一穎氏（跡見学園女子大学名誉教授、森鷗外記念会顧問）

No.27　令和元年6月発行
○「「令和」と鷗外」
坂井修一氏（歌人・東京大学教授）
○「ベルリンからの便り」
ベアーテ・ヴォンデ氏（ベルリン森鷗外記念館副館長）

No.28　令和元年9月発行
○「いわき市立草野心平記念文学館所蔵資料でたどる森鷗外、茉莉とのゆかり」
渡邊芳一氏（いわき市立草野心平記念文学館専門学芸員）

○「点から線へ、そして面へ
―『森鷗外宛書簡集2〈あ―い〉編』編集を終えて―」
須田喜代次氏（大妻女子大学教授、森鷗外記念会常任理事）

No.29　令和元年12月発行
○「旧安田楠雄邸庭園、百年目の耐震補強工事を終えました」
仰木ひろみ氏（旧安田楠雄邸庭園プロパティマネージャー）

No.30　令和2年3月発行
○「死を生きた人びと」
小堀鷗一郎氏（新座市堀ノ内病院訪問診療医）

No.31,32 合併号　令和2年9月発行
○「鷗外・短篇小説の魅力」
小泉浩一郎氏（東海大学名誉教授、森鷗外記念会会長）
○「名誉館長談　カミュの『ペスト』を久しぶりに読む」
加賀乙彦氏（当館名誉館長）

No.33　令和2年12月発行
○「鷗外の「別離」と『ゼッキンゲンのトランペット吹き』」
瀧井敬子氏（元東京藝術大学特任教授）
○「コレクション展「拝啓、森鷗外様」
――鷗外に届いた手紙によせて手紙を読む楽しさ」
山崎一穎氏（森鷗外記念会顧問）

No.34　令和3年3月発行
○「土屋文明生誕130年没後30年」
小笠原祐治氏（群馬県立土屋文明記念文学館特別館長）
○「新型コロナとアキレス腱
―『森鷗外宛書簡集3〈う―お〉編』発刊に寄せて―」
酒井敏氏（中京大学教授）

No.35　令和3年6月発行
○「墓前の献花
―鷗外一〇〇回忌に寄せて―」
倉本幸弘氏（森鷗外記念会常任理事）
○「鷗外の多才ぶりに支えられる連載」
須藤唯哉氏（毎日新聞学芸部記者）

No.36　令和3年9月発行
○「西升子のことども」
川崎勝氏（武蔵野大学客員教授）
○「掌のなかに明治がある
―『森鷗外宛書簡集4〈か―こ〉編』発刊に寄せて―」
出口智之氏（東京大学准教授）

No.37　令和3年12月発行
○「受け継いだ風は」朝井まかて氏（作家）
○「論考「ヰタ・セクスアリス」と「VITA SEXUALIS」」
小泉浩一郎氏（東海大学名誉教授、森鷗外記念会会長）

No.38　令和4年3月発行
○「『花子』と岐阜のゆかりびと」
林正子氏（岐阜大学名誉教授・特任教授）

No.39　令和4年6月発行
○「曾祖父・鷗外のこと」
森美奈子氏（エッセイスト）
○「詩人鷗外」高橋睦郎氏（詩人）

No.40　令和4年9月発行
○「学芸の自由は誰が守るか
――知友・岩村透と森鷗外」
今橋映子氏（東京大学大学院教授）

No.41　令和4年12月発行
○「『カズイスチカ』に見る「何者でもない」鷗外・森林太郎について」
山崎光夫氏（作家）

No.42　令和5年3月発行
○「記念の一年―享受から創造へ―」
倉本幸弘氏（森鷗外記念会常任理事）

No.43　令和5年6月発行
○「牧野富太郎、文京区、そして森鷗外」
田中純子氏（練馬区立牧野記念庭園学芸員）
○「鷗外文庫―誕生から今日まで―」
坂井修一氏（東京大学附属図書館長・教授）

No.44　令和5年9月発行
○「鷗外作品、志げ作品に見る茉莉」
藤木直実氏（日本女子大学他非常勤講師）

No.45　令和5年12月発行
○「漱石山房と千駄木の家」
守谷賢一氏（新宿区立漱石山房記念館館長）
○「森茉莉生誕120年に寄せて
――茉莉の首飾り」
島内裕子氏（放送大学教授）

No.46　令和6年3月発行
○「類まれな長編作家としての加賀乙彦氏」
沼野充義氏（東京大学名誉教授・スラヴ文学者）
○「加賀乙彦先生の没後一年に寄せて～軽井沢高原文庫での活動を通じて～」
大藤敏行氏（軽井沢高原文庫館長）

No.47　令和6年6月発行
○「森鷗外と福澤諭吉・慶應義塾」
横山寛氏（福澤諭吉記念慶應義塾史展示館専門員）

No.48　令和6年9月発行
○「上京者たちの文京
――金沢三文豪に寄せて」
大木志門氏（東海大学教授）

No.49　令和6年12月発行
○「疾走する先導者・山崎一穎先生」
須田喜代次氏（森鷗外記念会会長、大妻女子大学名誉教授）
○「観潮楼歌会を想う」石川美南氏（歌人）
○「よい短歌の生まれるところ」
佐佐木定綱氏（歌人）

No.50　令和7年3月発行
○「充実した文学発信の基地として
――50号を迎える「文京区立森鷗外記念館NEWS」――」
中島国彦氏（日本近代文学館理事長・全国文学館協議会会長）

主な寄贈図書一覧（2024年1月～12月）

左記の貴重な資料を文京区立森鷗外記念館にご寄贈いただき誠にありがとうございました。鷗外研究のための貴重な資料として、末永く保存・活用させていただきます。
（受入月日順）

【著者寄贈】
鈴木素夫『漱石先生の書斎は七畳間だった！ 明治村「猫の家」の虚像と実像』鈴木素夫 2014年12月
須田喜代次『書評 山崎一穎著『森鷗外論攻完』（日本近代文学）109集 2023年11月抜刷）
藤木直実『家庭への包摂と逸脱 与謝野晶子と三越』（國文自己54号 2015年2月抜刷）
佐々木央『森鷗外と村山槐多の〈横浜〉』神奈川新聞社 2024年3月
『与謝野晶子倶楽部 与謝野晶子の世界』23号通巻48号 与謝野晶子倶楽部 2023年10月 ＊檀原みすず『明星』を輝かせた与謝野鉄幹・晶子～メンターとしての森鷗外～』収録
「かまくら春秋」No.638 かまくら春秋社 2024年4月 ＊小堀鷗一郎『新連載 死を生きる 1「望ましい死とは」』収録
『書陵部紀要』75号 宮内庁書陵部 2024年3月 ＊田代圭一『宮内庁書陵部蔵「帝論考」の成立過程―森鷗外の書き込みをもとに―』収録
齋藤祐一『明治・大正の文学教育者 黒澤明らが学んだ国語教師たち』新典社 2023年6月（新典社選書116）＊『佐伯常麿――鷗外の筆を継ぎゆく国文学者』収録
島内景二『湖月訳 源氏物語の世界 名場面でつづる』源氏物語』1～4 花鳥社 2024年4、6、8、10月
「聖心女子大学論叢」142号、143号 聖心女子大学 2023年12月、2024年6月 ＊大塚美保『先鋭性の由来―森鷗外『女がた』の現代的意義と同時代文脈―』（上）（下）収録
『碧空』50号 長野吉田高等学校 2024年6月 ＊六川宗弘『読書雑記 22 鷗外「舞姫」の気になっていたこと―豊太郎の母の誄死って、ほんと？―』収録
齋木久美編『つなぐ人つなぐ文 手紙に「見る」そのひとらしさ』茨城大学五浦美術文化研究所 2023年3月

【発行所寄贈】
「カリスタ 美学・藝術論研究」No.15、No.16 美学・藝術論研究会 2008年12月、2009年12月 ＊吉田直子、井上康彦『『森鷗外氏講義 美学』―本保義太郎筆記ノート（於東京美術学校）―【翻刻】』（其之二）、（其之三）収録
「カリスタ 美学・藝術論研究」No.17 美学・藝術論研究会 2010年12月 ＊吉田直子『鷗外における芸術批評理論としてのハルトマン美学の移植―明治三〇年東京美術学校での美学講義の分析―』収録
「図書」902号、903号 岩波書店 2024年2月、3月 ＊新関公子『東京美術学校物語 西洋と日本の出会いと葛藤』14、15収録
『ベルギーと日本 光をえがき、命をかたどる』伊澤朋美編 ベルギーと日本展実行委員会 2023年4月 ＊第2章 1『武石弘三郎のベルギー留学』収録
『世田谷文学館 収蔵資料 調査と探究 01 石川淳／椎名麟三 上巻』世田谷文学館編刊 2024年2月
「#KVA学院だより」No.154 東京家政学院 2024年4月 ＊家政学院のいま『森鷗外記念館の特別展「鷗外の食」の「レクラム料理」を再現して』収録
『東洋美術史の父 大村西崖 第五四回企画展』富士山かぐや姫ミュージアム編刊 2017年3月
「日本近代文学館年誌 資料探索」19 日本近代文学館編刊 2024年3月 ＊原貴子『森鷗外「羽鳥千尋」と医術開業試験制度』ほか収録
「森鷗外記念館館報 ミュージアム・データ」28号 森鷗外記念館企画・構成・発行 2024年3月
「紀要 風」27号 群馬県立土屋文明記念文学館編刊 2024年3月 ＊坂井修一『第二回 土屋文明記念文学講座、神戸道子『森鷗外と群馬ゆかりの人々』収録
『日本医科大学 歴史写真集』日本医科大学同窓会事務局編 日本医科大学同窓会・橘桜会 2024年4月
「学習院大学史料館紀要」30号 学習院大学史料館編刊 2024年3月 ＊長佐古美奈子『宮中晩餐会の歴史的考察 その（五）―ガーター勲章奉呈・内親王婚儀・明治の終り―』収録
「青山語文」54号 青山学院大学日本文学会編刊 2024年3月 ＊西井弥生子『内田百閒 動詞の不変化語尾について』の役割―国語施策との関わり―』収録
「俳句文学館紀要」23号 俳人協会 2024年11月 ＊桜もとろ『内藤鳴雪の俳句観とその変遷』収録
「漱石山房記念館だより」17号 新宿区立漱石山房記念館編刊 2024年11月 ＊山口直孝『一枚の写真から―千駄木町時代の漱石の書斎―』収録
『ドナルド・キーン・センター柏崎 年報』2023年度 ブルボン吉田記念財団 ドナルド・キーン・センター柏崎編刊 2024年11月 ＊平野啓一郎講演『ドナルド・キーンさんの思い出』収録
『門司情景―文学でたどる― 特別展図録』今川英子監修、北九州市立文学館 2024年10月
『館報 石川啄木記念館 令和5年度』石川啄木記念館編刊 2024年12月 ＊『文京区に残る啄木のあしあと』収録

【その他】
『独協七十年』天野貞祐監修 独協学園 1953年12月
＊森於菟『独協の旧師旧友』収録
『日本産蛇類カラー写真図譜並びに日本産毒蛇咬症の治療』1～3 森眞章著 医学書院発売 1982～1986年
『Der Improvisator』H.C.Andersen著、H.Denhardt訳 P.Reclam 刊年不詳
ほか

これからの催しもの

催しは◎以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。
詳細は、チラシやHPをご覧いただくか、当館までお問い合わせください。
★応募多数の場合抽選とさせていただきます。
★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

5月17日（土） 14:00～15:30
展示関連講演会「献呈署名本の世界」
講師：川島幸希氏（秀明大学名誉学長、近代文学署名本コレクター）
会場：講座室　定員：50名　料金：無料 ※要本展観覧券（半券可）
申込締切：5月7日（水）必着

6月8日（日） 11:00～12:30
鷗外講座基礎編 第1回
講師：影山亮氏（帝京大学文学部日本文化学科講師）
会場：講座室　定員：50名　料金：500円
申込締切：5月23日（金）必着

6月22日（日） 11:00～12:30
鷗外講座基礎編 第2回
講師：影山亮氏（帝京大学文学部日本文化学科講師）
会場：講座室　定員：50名　料金：500円
申込締切：6月6日（金）必着

7月6日（日） 11:00～12:30
鷗外講座基礎編 第3回
講師：影山亮氏（帝京大学文学部日本文化学科講師）
会場：講座室　定員：50名　料金：500円
申込締切：6月20日（金）必着

5月31日（土） 14:00～15:30
展示関連講演会「鷗外献呈本に見る大逆事件」
講師：坂井修一氏（東京大学副学長・附属図書館館長、歌人）
会場：講座室　定員：50名　料金：無料 ※要本展観覧券（半券可）
申込締切：5月19日（月）必着

7月6日（日）、7月（月） 11:00～17:00
七夕イベント ◎
期間中、館前に短冊作成コーナーと笹を設置します。
会場：当館前　料金：無料

7月9日（水） 9:00（早朝開館）～17:30（最終入館）
鷗外忌記念行事 ◎
鷗外の命日（7月9日）に展覧会を観覧された方に、オリジナルしおりをプレゼントします。

7月13日（日） 14:00～15:30
鷗外忌記念講演会「鷗外が見たドイツ」
講師：美留町義雄氏（大東文化大学教授、森鷗外記念会常任理事）
会場：講座室　定員：50名　料金：1,000円
申込締切：6月27日（金）必着
今から140年前にドイツへ留学した鷗外、実際に何を見てどんな生活をしていたのか。
様々な角度から若き「森林太郎」の日々を紐解きます。

◇◆上記イベントの申込方法◆◇

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様（はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで）、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。**申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。**

①往復はがき　往信に参加希望プログラム名・日程・氏名（ふりがな）・住所・電話番号、返信用には、住所・氏名を明記の上、
〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館 イベント係
までご応募ください。
※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。

②Eメール　件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名（ふりがな）・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、
bmk-event@moriogai-kinenkan.jp
までご応募ください。
※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。
※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

［ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外の使用はいたしません。］

2025年度前期 文京区立森鷗外記念館 開館カレンダー

4月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	●7	●8	●9	●10	●11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	●22	23	24	25	26
27	28	29	30			

5月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	●26	●27	28	29	30	31

6月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	●23	●24	25	26	27	28
29	●30					

7月

日	月	火	水	木	金	土
		●1	●2	●3	4	5
6	7	8	○9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	●22	●23	24	25	26
27	28	29	30	31		

8月

日	月	火	水	木	金	土
					1	○2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24 31	●25	●26	27	28	29	30

9月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	●24	●25	26	27
28	29	30				

- コレクション展「**鷗外の妹・喜美子の家族―森家と小金井家―**」 1月18日(土)～4月6日(日)
- 特別展「**本を捧ぐ――鷗外と献呈本**」 4月12日(土)～6月29日(日)
- コレクション展「**小説『舞姫』を読んでみよう**」(仮称) 7月4日(金)～9月30日(火)
- **鷗外忌記念「遺言書」オリジナル展示** 7月4日(金)～7月31日(木)

○ 早朝開館(9時より)
○ 夜間開館(20時まで)
● 休館日

開館情報は予告なく変更になる場合があります。
詳しくは当館までお問い合わせください。

編集後記

おかげさまで本誌「文京区立森鷗外記念館NEWS」は50号を迎えました。定期刊行にあたっては、5～6頁でご紹介した執筆者の皆様、図版等の掲載をご許可頂いた施設の皆様、レイアウトや印刷など誌面作りでお力添え頂いた皆様、これまで多くの方々にご協力を賜りました。また、最新号を心待ちにしてくださっている読者の皆様のお声も届いております。この場を借りて御礼申し上げます。

春の足音が近づき、文京区内ではさまざまな花まつりが開催されています。4月1日から30日までは根津神社でつつじまつりが催されます。つつじまつりのマップをご提示いただくと、展示観覧料とカフェドリンクが2割引きとなりますので、当館にも是非お立ち寄りください。散策したくなる季節、当館の近隣情報は、受付で配布しているオリジナルの「おさんぽマップ」が便利です。

新年度より解説ボランティアの新規募集を行います。詳細は当館HPで告知しますので、ご関心がある方は最新情報をお待ちください。

前号4頁の「展示のお知らせ」におきまして誤りがありました。正しくは左記の通りです。訂正してお詫び申し上げます。

2～3行目
(誤)東京女子師範学校附属高等女学校
(正)東京師範学校附属高等女学校

交通案内

●電車をご利用の場合
- 東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
- 東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
- 都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分
- JR線・京成線「日暮里」駅 西口 徒歩15分

●バスをご利用の場合
- 都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
- 都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
- B―ぐる千駄木・駒込ルート「19特養ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分

※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: https://moriogai-kinenkan.jp

開館時間 10:00～18:00(最終入館は17:30)
休館日 毎月第4月・火曜日(祝日の場合は開館、例外あり)、年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間、燻蒸期間等

文京区立
森鷗外記念館
Mori Ogai Memorial Museum

印刷物番号 D0124050